郷土ちがさき

第 160 号
発 行　令和６年６月１日
発行者　茅ヶ崎郷土会
会 長　平野文明
編集責任 平野文明

上正寺の開基 佐々木四郎高綱のこと　山本俊雄 ……２
紀州役所 七里様について　（故）山口金次 ……６
風（自由投稿欄）◎英国のソウルフード フッシュ＆チップス（川村美子）　◎音貞をめぐる今年の冒険（長谷川由美）
事業報告◎３０７回大和市の諏訪神社・深見城探訪 ◎３０８回市内の東海道を歩く① ◎「東海道を歩く①」参加の記（染谷倫人）

子どもの頃、「文明の利器」という言葉がありました。しかし近頃はほとんど聞きません。どうしてなんだろう。「文明」が私の名前と同じだからかな？　と思ったのですが、おまえは「文明の鈍器」だと、これまたなぜだか?、みんなが言いますので、文字が同じだからということではないです…、よね。

昔は、「文明の利器」はたくさんありました。私が持っていたのは、鉛筆を突っ込んでクルクル回す鉛筆削り。おもちゃみたいなものでしたがアッという間に鉛筆がよみがえる。そのほんのわずかな時間に大いに勉強したものです。また、大人たちにとっては自家用車だったでしょうか。これは「利器」というより、まずステータスのシンボル、次に遊びに使うもの、最後に、移動を助けるという役目の大変便利な利器になりました。

今の世の中ではどうだろうかと考えました。すぐに浮かんだのがコンピューター、同類のスマートフォン、原発、武器としてのドローン、宇宙空間から発射するために開発中の核ミサイル。

「文明の利器」という言葉、時代が変わってイメージが悪くなりました。特に、ガラケーしか使えない私には。

（令和六年六月一日　茅ヶ崎郷土会々長　平野文明）

上正寺の開基、佐々木四郎高綱のこと

宇治川の先陣争いの段

山本俊雄

第三〇八回 史跡・文化財めぐり「茅ヶ崎市内の東海道を訪ねる その①」の事前勉強会の時（令和六年二月二十日）、上正寺について説明をしたのですが、開基が了智房道円こと佐々木四郎高綱であること。そこで佐々木高綱の人となりを説明したく、名馬「いけずき」が房総から渡ってきた、という横須賀での伝説から話しました。

木曾義仲との合戦（元暦元年：一一八四　正月）に上京する出陣前に、梶原源太景季が頼朝に「いけずき」をお借りしたいと申し出ますが、「自分が使うこともあるので」と貸してもらえず、その代わりと言って、もう一頭の名馬「するすみ」を貸してもらいます。合戦に赴く途中、駿河でいけずきに乗った佐々木高綱を見た梶原景季は、自分には与えずに佐々木高綱には与えたのかと怒り心頭、この上は佐々木と刺し違え、良い武者二人を失わせて頼朝に損をさせようと血相変えて高綱に迫った、というところで話が終わってしまいました。受付のところでごちゃごちゃしている間に話すことを忘れてしまい申し訳ありませんでした。

後で思い出したのですが、同年三月九日のめぐりの本番の時も自転車でついていくのがやっとのこと、話す機会もないまま気になっていました。

そこで続きの話ですが、高綱を見た景季はどうしたでしょうか？　有名な話ですのでご存じの方も多いと思います。話そうとしたのは、いけずきに乗った高綱が自分から景季に近寄り

「やあ！梶原殿、このいけずき、盗んできたよ！　梶原殿が借りられないいけずきを、自分ごときが借りられるわけがないので盗んだのだ。これで手柄を立てられなければ打ち首にされるは必定、手柄を立てられるようによろしく頼むよ。」と言われた梶原源太景季は、怒りの炎もどこへやら、

「思い切ったことをするな！　まあ頑張れよ」

と言うしかなくて怒りが治まった、と。この話から佐々木高綱（永暦元年：一一六〇生まれ、この時二十三、四歳　―ウイキペディア）は、若い武者に似合わず機転が利く、状況判断のできる人であった、と話そうと思ったのですが、できなかったのでここに記します。

念のために『平家物語』（文献①）と『源平盛衰記』（文献②）を確認しました。

『平家物語』では少し違って、私の記憶違いで、先ず梶原も佐々木も名馬を借りようとしたのではなく、所望したとあります。佐々木高綱には頼朝側から「所望の者はいくらもあれども、存知

せよ」と言われて賜ったとあります。
どうも私自身が、高価な馬を賜るという感覚に至らず、貸し借りというケチな性分にとらわれていたようです。
高綱が梶原景季に会う場面も、高綱の方からでなく、欲した馬が手に入らなかった景季が、いけずきを賜った高綱に、取り組もうか突き落そうかと思いながらも、まず言葉をかけた。「なんと、佐々木殿、いけずきをいただいたそうだな」とあり、ここで高綱は頼朝の言葉の「所望のものはいくらもあれども…」を思い出し、「盗んできたのだ」と答えます。それに対して景季が「残念だ。それなら自分も盗むべきであった」と言って、高らかに笑ってその場を去っていった。『平家物語』の文中の解説では、「高綱の機転だけでなく、怒りをといてどっと笑ってその場を離れる景季の明朗闊達で何の屈託もない性格」と特筆しています。
『源平盛衰記』では、いけずきを賜る場面が少し違っていて次の様な文章になっています。
所望する梶原景季は、佐殿（頼朝）の御前に参りて「君も御存知ある御事に候へども、弓矢取る身の敵（かたき）に向ふ習ひは、能き馬に過ぎたる事なし。…さればいけずきを下し預かりて、今度宇治河の先陣つとめて、木曾殿（木曾義仲）を傾け奉り候はばや」と、傍若無人に憚る所なく申したり。頼朝は、土肥の杉山に隠れ居た時に梶原に助けられた事も忘れ難いが、弟の蒲の冠者 範頼（かばのかんじゃ・頼朝の異母弟）もいけずきを所望している中で、「景季が推参の所望、頗る狼藉なり」などと考えた挙句に、梶原景季には「大名・小名、八箇国の者共、内外につけて所望ありき。平家と木曽と一になって、大きなる騒ぎとなりなば、頼朝も打上がらん。その時の料にと思ひて、誰々にも賜はざりき。これはいけずきにも相劣らず、とて磨墨（するすみ）を賜びにけり。景季は磨墨、誠に逸物なりければ、笑みを含み、畏まって罷り出づ。
とあり、喜んで退出したのです。
一方の佐々木高綱は、明日（あくる日）の辰の始めに（午前七時ごろ）佐殿の館に早参しますと、頼朝から
「御辺は近江に在国と聞いていたので、その気があれば軍勢の上洛について京に上るはずと思っていたが何時下向してきたのか」と問われ、高綱が答えるには、
「江州佐々木荘に居たのでこのような騒動が起きれば、京に打上るのが戦の習いでしょうが、今一度見参し、別れの挨拶を申し上げ、何処へ討手に向かえとの仰せをもらいたく下りましたが、一匹持つ馬が動けなくなりました。親しい人や知り合いにも馬一匹を借りたいと思っているうちに既に大名・小名が進発してしまったところです。」と申しますと、頼朝は聞き流して、
「下向、今に始めざる志、神妙神妙…」の言葉から木曾、宇治川のこと、石橋山の合戦で佐々木兄弟の活躍で命を助けられたこと、日本の半分を与えようと思ったが未だ世がおさまっていないこと、此度は宇治川の先陣を勤めて名を上げよ、等と話したうえでいけずきを「御辺に預け奉る」
と書かれています。
この時に頼朝は、
この馬所望の人あまたありつる中に、舎弟 蒲冠者も申しき。殊に梶原源太直参して、まひらに申しつれども若しの事あらば乗って出でんとすればとて賜ばざりき。その旨を存ぜられ

よ。

と言っています。

これは、やはり佐々木高綱が所望を申し出たのではなく、わざわざ近江から鎌倉に挨拶に来たうえで出陣をするのと、痩せ馬がつぶれて馬のない高綱を頼朝は憐れみ、好意で与えたのでしょう。

その後、梶原景季は、いけずきを引く舎人（とねり）に

「いかなる人の馬か？　佐々木殿とは誰ぞ。三郎殿か、四郎殿か」と聞くと、舎人は「四郎殿の御馬！」と応えます。

景季は「口惜しき事にこそ。…いつ死なんも同じ事。日頃は佐々木に宿意なし。今日限りといえ敵だ」と待ち構える所に、四郎高綱は郎党どもに、

「あれは梶原源太。あの景気を見るに、馬の立様、人を待つ様、ただ事とは覚えず。いけずきゆえに、確かに高綱（自分）と組もうと思っているようだ。鎌倉殿のこころせよとはこの事にこそ。…梶原我に組むならば心あれ、とささやき」て通り過ぎようとすると梶原源太並びかけて、

「如何に佐々木殿、遙かに見参し奉らず。あの御馬は上（かみ＝頼朝）より賜びてか」と言ひ続けて押並ぶ。

高綱、にこと打笑ひて申す様、

「…盗み出して夜にまぎれ、若し御勘当もあらん時は、然るべき様に見参に入れ給え（取りなして欲しい）」。

源太、誠と心得て、

「げにげに、佐々木殿、たやすくも盗み出だし給えり。この定ならば景季も盗むべかりけり。正直にてはよき馬は儲くまじかりけり」と狂言して、打連れてこそ上りけれ」と、冗談を言いながら京に向かった、とあります。

これは平家物語の解説に書かれていたのと同じく、鎌倉武士の明朗闊達さを表しているのとともに、『源平盛衰記』にはくどいぐらいの理由、説明が多く見られます。それは「梶原源太、佐々木四郎が打連れてこそ上りけれ」のすぐ後に、中天竺に象王太子といひし人の話（太子が異国との戦いに一匹の象のみ温存していたのを囚人が盗み出し敵を滅ぼし一転勧賞をもらった話）があるのは、高綱の話に似ているという挿話などは少しくどすぎるのかもしれません。

宇治川の先陣争いにおいても、『平家物語』には、

先に進む景季に佐々木四郎、

「此川は西国一の大河ぞや。腹帯（はらび）ののびて見えさうは。しめ給へ」といわれて、梶原さもあるらんとや思ひけん、左右の鐙（あぶみ）をふみすかし、手綱を馬のゆがみにすて、腹帯をといてぞしめたりける。そのまに佐々木はつとはせぬいて、河へざとぞうちいれたる。

梶原たばかられぬとや思ひけん、やがてつづいてうちいれたり。「いかに佐々木殿、高名せうとて不覚し給うな。水の底には大綱あるらん」といひければ、佐々木太刀をぬき、馬の足にかかりける大綱どもをばふつふつとうちきりうちきり、むかへの岸にうちあがる。佐々木、鐙ふばりたちあがり、大音声をあげて名のりけるは、

「宇多天皇より九代の後胤、佐々木三郎秀義が四男、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣ぞや。我と思はん人々は高綱にくめや」とて、をめいて駆く。

と書かれています。

『源平盛衰記』では、荒れる宇治川を前にして、義経の評定と下知の下に、畠山重忠が、渡れるか渡れないか調べて見参に入れ

ようとしている時に、

平等院の小島が崎より武者二騎駆け出でたり。梶原源太と佐々木四郎なり。…誰か先陣と見るところに、源太、颯（さっ）と打入れて、遥かに先立ちけり。

高綱言ひけるは、「いかに、源太殿。御辺と高綱と外人になければ（他人の間がらではないので）かく申す。殿の馬の腹帯は以ての外にゆるまって見ゆるものかな。この川は大事の渡りなり。河中にて鞍踏み返して、敵に笑われ給うな」と言ひければ、（梶原源太景季は）さもあるらんと思ひて、馬を留め、鐙踏ん張り立上り、弓の弦を口にくわへ、腹帯を解ひて引き詰め引き詰め締めける間に、高綱、さっと打渡して、二段ばかり先立ちたり。

源太、たばかられけりと安からず思ひて、これも打浸して渡りけるが、馬の足、綱にかけて思う様にも渡されず。

高綱太刀を抜き、大綱・小綱三筋さっと切流し、向かひの岸へ打上り、鐙踏ん張り弓杖（ゆんづえ）突いて、「佐々木四郎高綱、宇治河の先陣渡りたや」と名乗りも果てぬに、梶原源太も流れ渡りに上りけり。

とあります。両書とも高綱が腹帯のゆるみを指摘したのが河原でのことになっていますが、私は河中のこととばかりと思っていました。いかに正確に読んでいないか反省しきりです。今回、両書を読み返してみますとだまされた高綱だけでなく、だまされた景季もあっけらかんとして爽やかで羨ましい行動をしています。

ちなみに高綱は文治二年（一一八六）には長門・備前の守護に、また安芸・周防・因幡・伯耆・出雲・日向などに恩賞地を拝領しています。ただ早くに家督を譲り（建久六年：一一九五、三五歳の時）、高野山大悲金剛院に出家し、西入と号し、諸国を巡回したと伝えられています。各地に高綱を由緒とする寺社や宝物が多く残されています。上正寺もその一つですが、各々宗派が違っているのは鎌倉時代以後の影響と思われます。横浜市港北区鳥山町（小机の南側）一帯は高綱の領地で鳥山八幡宮の近くに高綱の館があったと言われています。近くには頼朝に命じられ高綱が創建した三会寺（さんねじ）や馬頭観音堂（高綱はいけずきの霊を慰めるために駒形明神を建てたというがここだけが残る）等があります。

ウィキペディアによると佐々木四兄弟の母は源為義の娘（頼朝の父義朝の姉妹で、頼朝や義経さらに木曾義仲とも母方の従兄弟）になります）

【引用文献】

文献①『平家物語』（九）　全訳注　杉本圭三郎　講談社学術文庫

文献②『新定 源平盛衰記』第四巻　考定者　水原一　新人物往来社

ウィキペディア　（佐々木高綱）

令和六年四月二十四日記

紀州役所、七里様について

（故）山口金次
（編集　平野文明）

はじめに

茅ヶ崎郷土会の会員でも、今は山口金次さんを知っている人は少ないことでしょう。

山口さんは、昭和二十八年（一九五三）の郷土会発足に携わり、その後も会の一員として県内の郷土史研究を続けられました。筆者などは、昭和四十六年（一九七一）に茅ヶ崎に来てから、山口さんがお亡くなりになられるまで指導を受けたものです。山口さんは昭和五十八（一九八三）年五月に亡くなられました。この文章の末尾に、当時の郷土会々長　（故）野崎　薫さんによる山口さんへの追悼文を載せておきます。

前置きが長くなりました。述べたいことは以下のとおりです。

今年三月九日、三〇八回目の郷土会の史跡・文化財めぐりで、菱沼にある「七里役所跡」を訪ねました。本誌の二八頁にその報告があります。七里役所跡を訪ねるために、関係資料を捜していましたところ、「紀州役所、七里様について」という山口さんの手書き原稿が見つかりました。執筆時期も、いつ、どのような経過で私の手元にあるのかも思い出せませんが、郷土会々報のバックナンバーにも未発表のようです。山口さんの原稿は、小和田の上正寺と菱沼の長福寺の過去帳から、菱沼にあった七里役所の役人とその関係者の法名と戒名を書き抜いたものです。

本市の紀州藩の七里役所の資料はきわめて少なく、菱沼の長福寺境内にある七里役人関係者の四基の墓石が知られているくらいです。そこで、この山口金次さんの原稿をここに発表しておくことにします。今になっては、原稿の内容を再確認することは困難なことでしょうが、役に立て得る人の目にとまれば幸いです。

まず、長福寺の四基の墓石にある戒名と、山口さんが書き残してくれた同寺の過去帳にある戒名の一致するものをあげておきます。墓石の画像は本誌一〇ページに載せました。

写真の、墓石に向かって右から一基目

⑨受真（山口さんは「直」）妙念信女

同　二基目

⑬阿光道壽居士

⑭圓光教宗大師　（三字目を山口さんは「教」とする。）

同　三基目

④春屋弘源信士

⑧寂阿貞證信女

同　四基目

⑫還瑛童子　（一字目はしんにょうがない文字）

一基目には「眞翁岳□居士」もありますが、これは山口さんの資料にはなく、⑬と⑭、④と⑧は夫婦、⑫は 沢右ヱ門の子であ

ることが過去帳から分かりました。

なお、和暦に対する西暦の、地の文と同じポイント（文字の大きさ）のものは山口さんの記述、小文字は、間違えてあった和暦を編集者が正したものと、元々付けてなかった和暦に編集者が付けた西暦です。戒名・法名には「〇数字」を編集者が付けました。また、山口さんの原稿で判読できない文字は「□」としました。

（以上編集者記）

山口さんの原稿は次のとおりです。

諸大名の出した飛脚には、紀伊藩と尾張藩の両徳川家がおこなった七里飛脚があり、七里毎に継立所を設けて独立夫を発遣した。尾張家の分は、六郷から知鯉鮒宿（ちりゅうしゅく）までの間に、一〇ヶ所、紀伊家の分は神奈川宿より佐屋宿まで一四ヶ所、さらに伊勢より紀州まで一〇宿の飛脚小屋があったが、天明二年（一七八二）の幕府の触書によると、その小屋へ無宿者が集まる始末で管理は不十分のものであった。七里役の名は木曽街道筋にも早くから見えているので尾州家で使用したものと考へられるが、七里飛脚は宿人馬を煩わさないはずのものであるが、藩主の威光を笠にして難題を吹きかけて宿々を苦しめていたといふ。

五街道の元標である日本橋より七里は神奈川宿、その明神町に紀州家継立所が置かれ、尾州家のは保土ケ谷宿にあった。この間に一里塚が六ヶ所、次に茅ヶ崎の小和田[編集者注1]に七里役所の継立が置かれてゐた。ついで平塚・大磯を経て小田原に幕府の御用継立所は本町にあり、寛永十年（一六三三）より継飛脚の給米八十六石八斗を給ふ。又萬町には紀州家の七里役所の継立があり、街道筋七里ごとに設置して、江戸より和歌山への急便に備へられた所であった。

茅ヶ崎市小和田の七里役所には、小和田の上正寺の過去帳によると、[紀州候何某」とある戒名[編集者注2]が、享保二年（一七一七）から元文・宝暦・天明二年（一七八二）などあり、菱沼の長福寺境内には数基の墓石があり[編集者注3]、また過去帳には寛延二年（一七四九）・安永・寛政・文化・文政・嘉永・安政・万延・文久・慶応・明治九年（一八七六）までの[編集者注4]百二十七年間に渡る戒名がある。

小和田　上正寺過去帳より

①教頓　紀州役所　松尾幸助　享保二丁酉七月廿四日（一七一七）

②了心　〃　松尾伊兵ヱ父

③妙貞　〃　松尾幸助　元文三戊午八月十四日（一七三八）

[編集者注5]

④智性　〃　西村安人　坂口権八家来　宝暦十四甲申四月卅日（一七六四）

⑤教通　〃　藪下長兵ヱ　天明二壬寅十一月十七日（一七八二）

菱沼　長福寺過去帳写し

①紀州日高郡財部村[編集者注6]住人　塩崎□良九郎　同名　沢右ヱ門祖父

嘉永二年（一八四九）迄百年ニ成ル　（寛延二年一七四九）　右同人妻　同年迄六十四年ニ成ル（安永四年　一七七五）[編集者注7]

②釈教順信士　沢右ヱ門　宝暦六子六月廿三日（一七五六）

③覚道童子　利助子　寛政十二申（一八〇〇）
④春屋弘源信士　沢右ヱ門父　寛政十三酉正月十三日（一八〇一）
⑤穐岳清光信士　江戸ニ而死八十八才　文化十三子八月十五日（一八一六）
⑥艶顔智鏡信女　沢右ヱ門娘　文政十一子三月十三日（一八二八）
⑦諦嶽貞直信女　沢右ヱ門ババ　文政十二丑十二月二日（一八二九）
⑧寂阿貞證信女　沢右ヱ門ババ　文政十三寅五月廿七日（一八三〇）
⑨受直妙念信女　治良作妻　嘉永三戌五月廿九日（一八五〇）
⑩乗譽妙連貞西信女　沢右ヱ門孫　小田原須戸丁奥□毘助妻　安政二卯十一月廿八日（一八五五）
⑪法譽妙光貞□信女　沢右ヱ門娘寿満　一丁田町高井□七妻　小田原ニ而死ス亡記ス（ママ）　安政三辰二月廿九日（一八五六）
⑫□瑛童子　沢右ヱ門子　庄太良三才死　安政四丁巳八月十八日（一八五七）
⑬阿光道壽居士　八十八□　紀州公七里役勤依之授居士号余人不許　万延元申十一月廿日（一八六〇）
⑭圓光教宗大姉　沢右ヱ門祖母　慶応元丑九月六日（一八六五）
⑮法厳童子　沢右ヱ門子　俗名□□　慶応三卯天十一月廿二日（一八六七）
⑯法林童子　沢右ヱ門実子　水子　文久元酉年二月廿九日（一八六一）
⑰帰本道行信士　沢右ヱ門□　明治三庚午十一月十三日（一八七〇）
⑱帰還童女　沢右ヱ門子サノ□十四才　明治九丙子十一月三日（一八七六）

以上の戒名の但し書によって考察するに、小田原にあった七里役所とも塩崎沢右ヱ門の娘や孫が役人の妻になっているらしいので相当の関係があったようである。

［編集者注１］藤村潤一郎「紀州七里飛脚について」（平成二年創価大学人文論集２号一一一頁）、『南紀徳川史』八巻六七〇頁（昭和四十六年復刊）には神奈川宿の次に「小和田」とあり、山口さんも市内のその場所を小和田としているが、菱沼村内だったのではないだろうか。

［編集者注２］「法名」は浄土真宗で在家仏道者などに付ける名前、「戒名」は真言宗などで出家した人に付ける名前。上正寺は浄土真宗寺院なので「法名」とあるべき。

［編集者注３］現在あるのは四基。

［編集者注４］長福寺②の宝暦、⑦

⑧の文政が抜けている。

［編集者注５］山口さんは「元文三年」を一七三七としているので編集者が正した。ほかに上正寺⑤を一七八一と、長福寺の⑭を一八六七、⑮を一八六九としているので正した。また、上正寺③の「妙貞」は女性の戒名と思われるから、「松尾幸助」の次に「妻」が落ちているのではないだろうか。

［編集者注６］現在、御坊市湯川町財部

［編集者注７］この一行は意味が分からない。文中の「（寛延二年　一七四九）」と「（安永四年　一七七五）」は山口さんの書き込みと思われる。前者は嘉永二年（一八四九）の百年前の年号で、後者も嘉永二年の「六十四年」前であれば天明五年（一七八五）でなければならないから、「安永四年（一七七五）」は山口さんの間違いか。それにしても「嘉永二年」・「寛延二年」・「天明五年」が何を意味しているのか不明。

山口さんの手書き原稿は以上です。

次に野崎薫さんの追悼文を「郷土ちがさき」三八号（昭和五十八年九月一日発行）から転記します。

山口金次氏のご逝去を悼む

野崎　薫

われわれの師として、常に敬意していた山口金次氏には去る五月二日、入院先の小田原市国府津山近病院に於いて逝去されました。行年八十七才でした。

明治三十年七月四日、茅ヶ崎市西久保五二〇番地山口家に出生される。父太郎吉氏は篤農家として知られ、地域の指導者として信望あつく、部落長、村会議員、町会議員を歴任され、百六才という長寿の人でありました。

大正三年茅ヶ崎小学校高等科三年（当時高等科三年があったのは茅ヶ崎小学校だけ）を卒業と同時に、横浜市内の筒井洋服店に徒弟として住み込み、洋服仕立て職人の技能習得のために専念される。一人前の職人になって西久保の自宅に戻ると、昭和四十八年七月まで、実に六十年余りを主家に精勤されるという実直の人でした。温厚篤実という親ゆずりの性格とは言え、その誠実さは余人の遠く及ばざるものがあります。その間、関東大震災、第二次世界大戦末期の横浜大空襲と、二回にわたる世紀の大災害に依って、主家存亡の危機に直面するや、身を挺してその復興に努力されたと聞いています。

同好の士と計って、茅ヶ崎郷土研究会を設立されたのは昭和三十年代の始め（ママ）でした。当時の同志は十名足らずでしたが何れも一騎当千の猛者揃いで、集まると何時も談論風発、夜を徹するのが常でした。この中にあって山口さんは黙々として、暇さえあれば鞄を肩に地下足袋姿で村々をまわり、神社や寺、旧家を訪ねては古文書を調べ、或は古老の話をきき、墓地や路傍の石仏を調べるという、丹念のくりかえしでありました。

西久保宝生寺の阿弥陀三尊仏の発見はこの頃でした。昔から、お厨子を開けると目がつぶれると言い伝えられていた秘仏を住職に懇請して御開帳して貰ったところ、中から鼠が飛び出して来る有様、おそるおそる鼠の巣を取り除くと、金色瞭然たる三尊仏の出現には居並ぶ人たちも唖然としたということです。現在国の重要文化財に指定されている「善光寺式阿弥陀三尊仏」がこれです。

郷土史は足であるいて調べるもの、とは山口さんの口ぐせ、市内は勿論、県下の隅々までもその足跡が残されていない所はない

と言っても過言ではありません。その集められた資料と記録は実に膨大で他に求めることのできない程貴重なものです。作家永井路子氏が『相模のもののふたち』を執筆するとき、懐島氏にまつわる話や、遺跡の案内など、山口氏に三顧の礼を尽くしたという逸話があります。

　このように、氏の事蹟は数え上げたらきりがありませんが、茅ヶ崎郷土史はおろか、県下の郷土史を学ぶものにとって、かけがえのない人でありました。

　後に続く我々としては、氏の業績を肝に銘じ、茅ヶ崎郷土会を守り、後進に途を開きたいと思います。安らかなご冥福をお祈りします。合掌　　（郷土会会長）

風　自由投稿欄

英国のソウルフード　フィッシュ＆チップス

川村美子

私は１９８４年より英国に永住しております。その前にロンドンに旅行した時のフィッシュ＆チップスも美味しかったのを覚えていますが、住み始めた時、近所で買った、藁半紙に包まれたフィッシュ＆チップスを頬張った時、「さあはじまるぞ！」と気合いがはいったものでした。

ロンドンで一番古い
フィッシュ＆チップスのお店と筆者

湘南は海の幸、山の幸で食文化が豊かですが、英国の産業革命の時に魚が安く取れて、そのころ作られ始めた電車で英国中にどんどん運ばれました。チャールズデッキンズが１８３８年に書いたオリバーツイストには「魚のフライの倉庫」が登場します。きっと大勢の英国人達のパワーの源になったことでしょう！

私も、英国でのソウルフードと言えるのに、その歴史を知らなかったとは、失礼で申し訳なかったです。平野会長から、「会報のテーマにフィッシュ＆チップスなどは」のヒントをいただき、まとめてみました。

英国で生まれ育った私の娘が見つけてくれた、ロンドンで一番古いフィッシュ＆チップスのお店に行って来ました。店の名前は「**ROCK&SOLE PLAICE**」。写真に写っ

ているお店の看板には、フィッシュアンドチップスの作り方を店に教えた三人のレディーへの感謝が次のように書かれていました。

「私たちが初めてこの店を開いた時、フェンネル姉妹（アンナとラケル）がお店の上階に住んでいました。彼女たちの亡きお父さんは最初のオーナーの孫で、１９２０年代から１９６８年まで店を継いでいました。そのお店が消えないように、彼女たちが労力も時間も貢献して下さり、お父さんのレシピを私達に伝達して下さいました。昔働いていたメアリーグッデイーというこのあたりの世話焼きおばさんも、私たちに、ロックアンドソウルの新しいオーナーとしてはまだまだ修行が足りないと激励してくれました。彼女たちの頑張りのおかげで、今日のお客様たちに１４０年前と同じ高いレベルのフィッシュ＆チップスを提供できています。ありがとう！」

注文すると、タラ・カレイ・メバル・ヒラメなどのフライに、チップスと、好みでグリーンピースをマッシュしたのが出ます。衣がしっかりついて、からっと揚がったフィシュにレモン、ビネガーをかけ食します。私も書いているうちに、「ここにフィッシュ＆チップスがあれば！」と。

さて、湘南の海で獲れるお魚でフィッシュ＆チップスはいかがでしょうか？

とはいえ、いつでもロンドンにいらっしゃってくださいね。フィッシュ＆チップスご案内いたします。

二〇二四年　音貞をめぐる今年の冒険

長谷川由美

今年は、パリでオリンピックが開かれます。パリと言えば、川上音二郎、貞奴が、一九〇〇年の万博で大人気となった地ですが、この万博の附属大会として、第２回オリンピックも、パリで開催されていたのでした。

そして、今年は、オペラ「マダムバタフライ(蝶々夫人)」の作曲家プッチーニの没後百年にあたります。「マダムバタフライ」の原作はアメリカの小説で、日本の長崎が舞台です。アメリカ海軍士官の現地嫁となった蝶々さんが、母国へ戻った夫を信じて待ち続けるも、それはかりそめの結婚。ついには子どもを託し、自刃するという悲劇です。

蝶々さんは、帝に仕える武士の家に生まれたものの実家は没落し、芸者勤めをしていたという設定で、舞台の指定も満開の桜、父の形見の短刀、和服姿など日本趣味で溢れています。また、「お江戸日本橋」「越後獅子」といった日本の曲がモチーフに使われていることも有名です。そして、貞奴の舞台をプッチーニが

観て感動し、影響を受けてオペラとなったとも言われているのです。

この点だけでも興味深いのですが、音二郎亡き後の貞奴一座が、演劇版「お蝶夫人（マダムバタフライ）」を上演した…、という研究レポを見つけ辿ってみると、こんなことがわかりました。

川上貞奴一座の「お蝶夫人」は、一九一六年（大正五年）大阪で上演。早稲田大学演劇博物館のデジタルアーカイブには、番付（宣伝のためのポスターのようなもの）の表題として「お蝶夫人、ジャンヌダーク　成功間違いなし」というものがあり、え？？　ジャンヌダルクと二本立て？？　とびっくり。（表題だけで、実物は掲載されていないため詳細不明）

さらに台本が現存しないかと検索すると、一部がありました！「川上貞奴台詞抜書」の中に、ほんの数ページだけ。セリフの抜き書きは、字の通り、貞奴の台詞（せりふ）を抜き出して書いてあるものです。筆書きで、くずした文字で、なかなか読めませんでしたが、茅ヶ崎市の市史編纂担当さんにもアドバイスをいただいて、文字にしてみました。すると、その部分は「序幕」とされており、オペラの第一幕結婚式にあたるシーンでした。

原作の小説「マダムバタフライ」には、結婚式のシーンはありません。ということは、貞奴一座は、原作小説や、その戯曲を元に上演したのではなく、当時日本でも上演され、人気のあったオペラの筋を使って「お蝶夫人」を上演したということになるのでは？。

貞奴版「お蝶夫人」がどのような舞台であったのか、突き止められるほどの知識も研究もありませんが、少なくとも、「オペラにしか存在しないシーンがあった」とは言えそうです。想像を逞しくすると、貞奴一座がオペラの人気から、ここは一つ、女優貞奴の舞台にもしようじゃないか！と取り組んだのかな？と思うと、またまた興味深いことです。

このような小さな発見があり、今年の音貞オッペケ祭では、「お蝶夫人」もショートバージョンで上演します。貞奴一座の台本は見つけられていないので、「台詞抜書」と、日本で最初の小説「マダムバタフライ」翻訳本、北村喜八訳を使います。

武家に生まれ、芸者となる。貞奴さんの生い立ちは、蝶々さんに重なる部分があります。当時のなすすべをもたない女性の生き様を、貞奴さんはどのように思って演じたのだろう、などと思います。

こんな台詞があります。

蝶々「アメリカでは、離婚にしても、

日本のように「親許へ帰れ」とだけで追い出すことが出来ないんでございましょう」

貞奴さんは、女優引退後、実業家としても活躍し、設立した「川上絹糸株式会社」では、働く女児の教育に力を入れ、労働環境、福利厚生も整備されていたといいます。蝶々さんの台詞と、貞奴さんの活動が重なって、現代にもつながる大きなメッセージがあるように思えてきます。今年もまだまだ発見が続きそうです。

【情報】

「二〇二四音貞オッペケ祭～ヤッコブームと巨匠たち」

高砂緑地イベント

６月１日（土）～２日（日）

場所　高砂緑地・松籟庵　入場無料

復刻劇　川上劇総覧～「芸者と侍」「お蝶夫人」他　５本立て

＊演劇は緑地内をシーンごとに移動する回遊式上演です。

＊ハープ、オカリナ、玉すだれ、紙芝居などのステージイベント。呈茶、出店もあります

【編集子から】

「郷土ちがさき」１６０号は諸般の都合でひと月遅れの発行となりました。投稿いただいた記事の公開も、イベントの開催日寸前となり、申し訳なかったです。

茅ヶ崎郷土会の事業報告

第三〇七回　史跡・文化財めぐり

大和市の諏訪神社・深見城址などを訪ねる

平野文明

日時　令和五年十二月九日（土）　参加者　１５人

コース　茅ヶ崎駅集合（８：５０）―（東海道線）―藤沢駅―小田急藤沢駅―（小田急線）―鶴間駅―（これから徒歩）―①矢倉沢往還―②日枝神社―③伊勢社―④諏訪神社―⑤鶴林寺―⑥下鶴間ふるさと館（昼食）―⑦大黒天・開運神社―⑧観音寺―⑨深見城址―⑩下鶴間長堀の遺跡―（バス停「鶴間車庫」から鶴間駅）―藤沢駅―茅ヶ崎駅（解散）

事前の勉強会　令和五年十一月二十一日（火）午後、市立図書館で行いました。

①　矢倉沢往還

鶴間駅の東口に出ると、すぐに線路と交差する道路に出ます。グーグルマップには厚木街道とありますが、これは新しい道路で、駅から数１０メートルのバスの発着所から左にたどる道が矢倉沢往還です。私たちはこの道を④諏訪神社を目指しました。片側一車線で

矢倉沢往還
下鶴間の諏訪神社の近く　東（東京方面）を向いて

両側に側道があり、昔の面影をわずかに残し、住宅地の中を抜けています。

矢倉沢往還は『やまと歴史マップ』（以下『歴史マップ』と略記）次のように説明されています。

江戸の赤坂御門から南足柄の矢倉沢に至り、足柄峠を経て駿河国の沼津は三島に通じる古道で、東海道の脇往還として東西を結ぶ政治・経済上重要な街道だった。特に箱根が開通する元和四年（一六一八）までは官道として利用されたため、矢倉沢には近世を通じて関所が設置されていた。

往還沿いの厚木や伊勢原には六斎市（ろくさいいち）が立ち、また江戸時代中期以降には伊勢原の大山に詣でる人々の往来が増加するなど経済的にも信仰的にも栄え、「大山道」「青山街道」とも呼ばれた。（同書１頁）

②　日枝神社

進行方向の右手に山王原公園を見てさらに進むと、今度は左手に日枝神社があります。『新編相模国風土記稿』（３５０頁　以下『風土記稿』と略記）下鶴間村の項に「山王社」とあるものがこれと思われます。

日枝神社

境内を見学していたところ、軽トラで通りかかった人が車を止めて入って来ました。地元の方で土地の人しか知らないことをいろいろ教えて貰いました。この辺り、今は大きな家が道沿いにありますが、昔は村はずれだったそうです。

神社の入口に教育委員会が建てた「矢倉沢往還・滝山街道」の標柱がありました。滝山街道について、『歴史マップ』１頁に次の様に解説してあります。

滝山街道　八王子の滝山城（たきやまじょう）と鎌倉の玉縄城を最短距離で結ぶ戦国時代以降の古道で八王子道とも呼ばれる。南北に長く市域を縦断しており、小田原北条氏が関東一円を支配する上で、政治・経済・軍事的に重要視した。

日枝神社の辺りは矢

日枝神社にあった
庚申塔2基
左の塔は子どもたちの
いたずらでボコボコ

倉沢往還と滝山街道が重なっているのでしょう。

また、庚申塔が二基ありました。向かって右は像様がハッキリしませんが青面金剛、左は笠付の立派な塔ですが子ども達がいたずらで彫った穴だらけです。穴があるということは長いこと横になっていたのでしょう。正面下部にわずかに三猿が見えるので庚申塔と分かります。

③ 伊勢社

街道から、諏訪神社に向かう細道に入ると、「伊勢社」がありました。『風土記稿』（３５０頁）下鶴間村の項に「神明宮」とあるものがこれと思われます。

境内に立つ「伊勢社改修工事竣工記念」の碑（昭和六十年四月諏訪神社崇敬会建之）に「小倉晴夫氏の祖先が当社に特に関係が有る」とあるので、伊勢講で祭ったものと思われます。

④ 諏訪神社 下鶴間二五四〇

今回のめぐりの目的地の一つ目、諏訪神社に着きました。下見をした十一月には七五三の参拝者でにぎやかでしたが、本番の日はひっそりとしていました。境内は広く、社殿は昭和五十七年に改修されたと境内の説明板に記されていました。

『風土記稿』下鶴間村の項（３５０頁）には、村の鎮守として浅間社と諏訪社が記されています。一つの村に鎮守が二社あるのは珍しいことです。また「式内社岩楯尾神社と伝う。ことは座間入谷村に弁ぜり」とあります。

諏訪神社は相模国の式内十三社の中の岩楯尾神社（いわたておじんじゃ）の論社（ろんしゃ）の一つです。座間入谷村の諏訪神社の項（３４０頁）には次のように記載されています。

諏訪社　神体は幣束。式内 石楯尾神社なりと云う〈神名帳に高座郡小五座の内、岩楯神社あり〉。天安元年（８５７）五月、石楯尾神（ママ）、官社に列せし事、国史に所見あり〈文徳実録曰く「天安元年五月丙辰、近来霖雨（＝なが雨）不□（止まずカ）、今日、京中水溢、是日、在相模国従五位下 石楯尾神預官社」。按ずるに、郡中下鶴間村、大島村諏訪社（注相模原市緑区大島）をも式内石楯尾神社と伝う。津久井縣佐野川村（相模原市緑区佐野川）、名倉村にも石楯尾神社あり、皆当国郡中小五社の一なりと称す。津久井縣は古、当郡に孕りし地なれば、今、何れか旧社なるや考証を得ず。佐野川村神社に神体石楯と云う者（ママ）存し、縁起有り、併せ見るべし〉。村持。

また、非公開ですが次のような指定文化財があるそうです。『歴史マップ』（４頁）から引用します。

諏訪神社北辰一刀流奉納額［市指定重要有形文化財（非公開）］

明治十九年（１８８６）に北辰一刀流豊田平之らによって奉納された武道額で、縦１８２㌢×横２７３・５㌢の大きなものです。北辰一刀流は千葉周作を流祖とし、幕末に最もはやっ

た流派です。この奉納額から江戸時代後期に成立した四つの流派、北辰一刀流・鏡心明智流・無刀流・天然理心流の分布圏を見ることができます。特に北辰一刀流・鏡心明智流・無刀流の分布が判明したことは貴重です。

諏訪神社御神像［市指定重要有形文化財（非公開）］

左腰に太刀を差し、右手は矢を執り、左手は扇状の持物を握る姿をした木造の男神立像です。寄木作りで玉眼嵌入、頭部と両手首先は差込みで全体に彩色が施されています。面部の作風から一七世紀頃の作と考えられます。

この神像について、神社境内の説明板には次のように書いてあります。

…由緒書きによれば、元禄六年（１６９３）六月に領主江原氏代官　石沢喜兵衛、領主都築氏　代官瀬沼伝右エ門が神像を寄進し、ご神体として本殿に安置したと伝えていますので…（後略）。

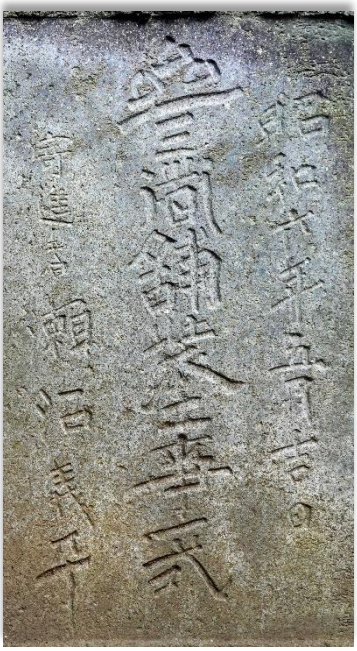
境内で目に付いたものを次に紹介します。

一、社殿の向拝の彫刻

新しいものですが立派な彫刻です。飛龍に乗って琴を弾く女性と、その上の唐破風には鳳凰に乗って笙を吹く男性の像があります。ネットで調べると琴を弾く女性は玉巵（ぎょくし）といい、笙を吹く男性は王子喬（おうしきょう）で、ともに中国の仙人とありました。王子喬は本来は白い鶴に乗っているのだそうです。王子喬の社殿彫刻は茅ヶ崎市本村の八王子神社にもあります。

二、変わった文字の「参道舗装工事」碑

昭和六年の銘がある碑ですが、中央の上二文字が変わった書体です。「参道…」と読みます。



三、地神塔

地神塔は茅ヶ崎にもあります。しかしこの形はありません。五角柱の各面に、天照大神・倉稲魂神（うかみたま）・植安姫神（はにやすひめ）・少彦名神（すくなひこな）・大己貴神（おおなむち）とあり、基礎石の正面には「村内社日講中」、また「文化十二年（１８１５）八月社

日」とあります。「社日」とは春分、秋分に最も近い戊（つちのえ）の日をいい、農村ではこの日に地神講（じじんこう）を開き地神を祭ります。五柱の神が地神とされたのでしょう。

諏訪神社を出て少し北方向に向かうとまた矢倉沢往還に戻ります。ここで往還は東向に方向を変え、道の両側は家々が並んでいます。この辺りは下鶴間の中心地で江戸時代には宿場でした。鶴林寺と観音寺があります。古民家を再生転用した「下鶴間ふるさと館」が設けられています。その中に下鶴間宿の説明が展示されています。ふるさと館に立ち寄るまえに、鶴林寺を訪ねました。

⑤ 浄土宗　鶴林寺　下鶴間一九三八

『歴史マップ』７頁に次のように記してあります。

宝亀山寿翁院と号し、鎌倉の光明寺を本山とする浄土宗のお寺。永禄十二年（１５６９）に貞山覚智和尚が開いたと伝わる。明治期までの間に何度か火災に見舞われたため再建が繰り返されて、現在の本堂は昭和四十九年に建てられた。本尊は阿弥陀如来。また、境内にまつられている地蔵菩薩像は、地下に入って断食し、即身仏となった俗名崇信という人物の菩提を弔うため、享和三年（１８０３）に建立されたと伝えられている。

鶴林寺の生地蔵

鶴鳴学舎（下鶴間学校）

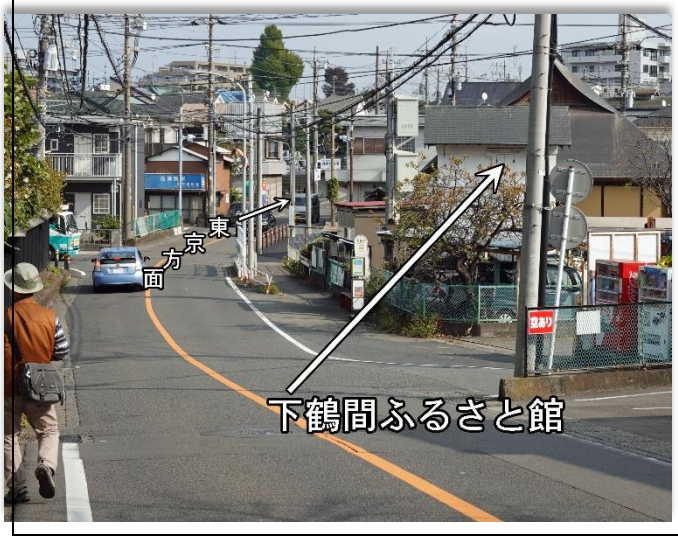
明治六年（１８７３）に下鶴間の井沢藤八の貸家を借りて設立された公立小学校。明治八年（１８７５）下鶴間学校と改名。明治十五年（１８８２）観音寺本堂の仮教場に移り、さらに鶴林寺境内に校舎が建築された。

『歴史マップ』にある地蔵は、現地では「生地蔵」と言われているそうです。入定塚（にゅうじょうづか）の事例の一つです。また、境内に不動堂があります。浄土宗なのになぜ不動堂があるのだろうかと不思議です。

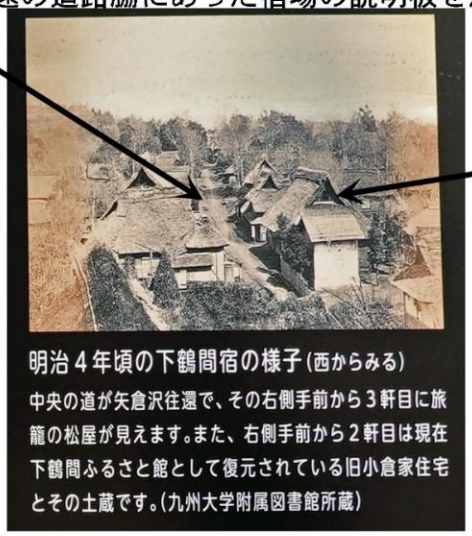
鶴林寺を出ると矢倉沢往還で、東（東京）に向かって緩い下り坂です。これを数一〇㍍進むと右側に「下鶴間ふるさと館」があり、この辺りが坂の底ですぐに道は登りになります。ふるさと館の辺りが下鶴間宿の中心だったようです。道路脇に説明板があり、昔の宿場を撮影した写真が掲げてありました。

⑥ 下鶴間ふるさと館　下鶴間二三五九―五

宿場時代から続く商家を使って下鶴間宿の様子を展示している大和市の博物館施設で



往還の道路脇にあった宿場の説明板を加工



明治４年頃の下鶴間宿の様子（西からみる）
中央の道が矢倉沢往還で、その右側手前から３軒目に旅籠の松屋が見えます。また、右側手前から２軒目は現在下鶴間ふるさと館として復元されている旧小倉家住宅とその土蔵です。（九州大学附属図書館所蔵）

す。私たちはこの縁側を使わせて頂いて昼食時間としました。

史跡めぐりを行ったのは九日でしたが、前日の十二月八日は目一つ小僧がやってくる「ヨウカゾウー」の日です。ふるさと館の入口にその小僧の人形と高い棹を立ててその先に「目籠（めかご）」を吊してありました。

ふるさと館について『歴史マップ』１０頁に次の様に説明してあります。

矢倉沢往還沿いの旧下鶴間宿に位置し、この場所にあった商家・旧小倉家住宅の母屋と土蔵を復元した施設。母屋は安政三年（１８５６）の建築で、宿場の商家建築として県内でも数少ない建物。土蔵は前身建物の古材を用いて大正七年（１９１８）に再建された商家の付属建築で、一般に袖蔵（そでくら）と言われている。

また館内の説明パネルに下鶴間宿の説明があります。

下鶴間宿　下鶴間宿は矢倉沢往還沿いの宿場の一つで、紺屋・居酒屋・餅屋・質屋などの商家や、山本屋・松屋・三津屋・松葉屋・角屋・ちとせ屋などの旅籠があった。天保二年（一八三一）には、渡辺崋山が小園村（綾瀬市）に向かう途中、旅籠「まんじゅう屋」に一泊して、その時のことを「游湘日記（ゆうそうにっき）」の中で「酒を命し、よし。飯うまし」と記している。また、下鶴間宿の様子を「ものさびしい」と表現していることから、当時の下鶴間宿はまだにぎやかというほどではなく、この宿場がにぎわいを見せるのは幕末頃になってからのようだ。

このふるさと館は、展示物とともにわかりやすい説明がなされていて、建物もきれいに管理されていると思いました。

⑦ 大黒天・開運神社

ふるさと館をあとにして往還を東（東京方面）に進むとあります。庭の奥は個人のお屋敷ですが、その入口付近に小さなお社や当家の説明石碑などがあります。石碑には「新田軍の鎌倉進撃路

ふるさと館に展示してあった下鶴間宿の地模型

ふるさと館でひと休み

／南朝忠臣新田氏縁の家」と書いてあります。また庭には太刀をを捧げ持つ新田義貞の像が立っています。

⑧　真言宗　観音寺　下鶴間二二四〇

ふるさと館から東京方面に進むと境川に当たります。この辺りは新しい大きな道路が交差していて通過する自動車がものすごい数です。境川の橋を渡らず、進行方向左手に次の見学地、観音寺があります。

『歴史マップ』（５頁）に次の様に記されています。

鶴間山東照院と号す真言宗のお寺で、寺伝には宝暦年間（１７５１～６４）に現在の寺号になったとあり、また、『新編相模国風土記稿』にも「観音寺鶴間山東照院ト号ス。古は金亀坊ノ号アリ。」とあることから、以前は金亀坊と号していたようだ。本尊の十一面観音は秘仏で、十二年に一度卯年の四月に開帳される（武相卯年観音札所第一番）。境内には本堂のほか弁天堂、金亀坊稲荷、太子堂がある。

《観音寺の文化財》

観音寺厨子　〔市指定重要有形文化財〕

背面板壁の内部に「天文十三年」（１５４４）の墨書があり、製作年代の分かる厨子として貴重。正面扉は観音開きの桟唐戸（さんからど）で、上部には輪違い菱格子の格子窓がつけられている。頭貫（かしらぬき）・木鼻（きばな）は比較的古い様式を留め、柱は上・下端をわずかに細めて丸くした粽柱（ちまきばしら）。柱と側板（がわいた）内面は黒塗り、扉と側面外面には朱塗りの跡が一部残っている。

観音寺木造地蔵菩薩半跏像

〔市指定重要有形文化財〕

右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、蓮台の上に座して左足を垂下した地蔵菩薩で、光背は三個の宝珠を配した輪光。寄木造りで玉眼嵌入、肉身部は漆箔。耳孔や鼻孔は深く造られ、たいへん量感ゆたかである。江戸時代初期の作と考えられ、市内の仏教彫刻の中でも佳作といわれている。

観音寺を出て矢倉沢街道を離れ、境川に沿いその下流方向に進み深見城址を目指しました。境川の両岸はコンクリート護岸に固められていました。

⑨　深見城址

深見城跡に着きました。この地は江戸時代は深見村の一部でし

境川の下流を向いて
正面の白い建物の向こうに深見城址がある

た。今までたどってきたのは下鶴間村内ですので、住所が違います。深見城跡は現在の地名で「深見字城ヶ岡」となっています。『風土記稿』深見村の項（同書三巻３１５～１６頁）に次のように記されています。

江戸より十一里。『和名抄』の当郡の郷名に深見あり。宝徳（一四四九～五二）の頃は山田伊賀入道経光領して此の地に住す。

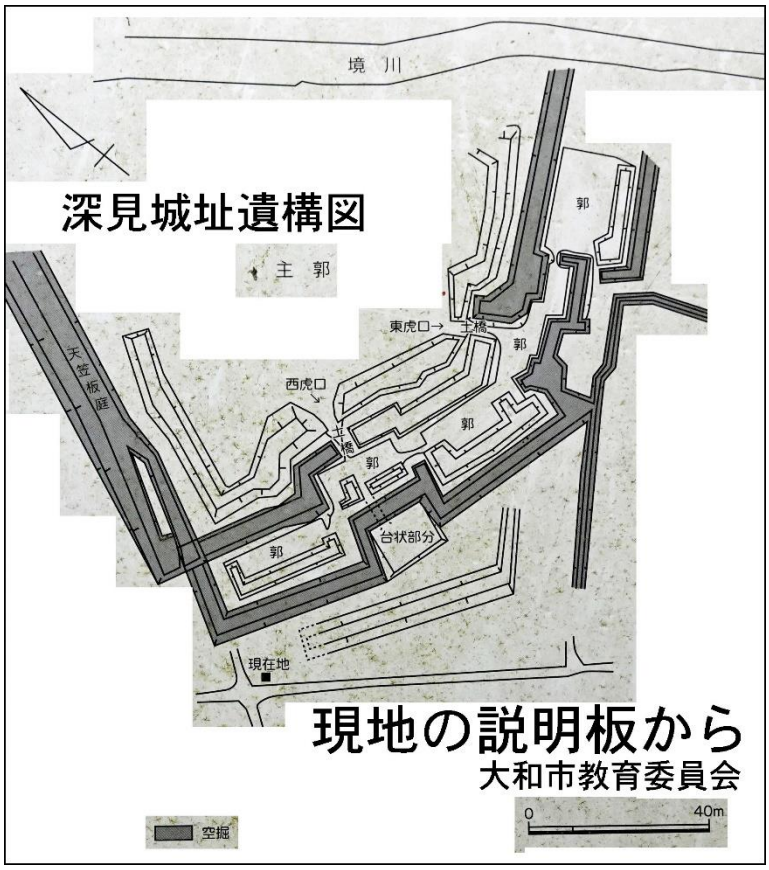
この山田経光について、さらには次のように続きます。

山田伊賀守経光城址　（深見村の）東北の隅にて境川に臨む。今、陸田及び林となる。土居の跡少しく残る。伊賀入道経光は藤原の枝流にて宝徳の頃の人なり〈案ずるに、隣村鎌倉郡瀬谷村妙光寺の鐘は、元、武州都筑郡恩田村万年寺の鐘なりしを、伊賀入道経光、彼の寺より故あって預かり、後、妙光寺に寄進す。今、其の事、銘文に存す。文中に経光相州瀬谷郷に住せし事見ゆ。則ち当所（深見）を指して云うに似たり〉

この記事は混乱しています。鎌倉郡瀬谷村は高座郡深見村からすれば境川を越した東側にあった村です。そこの妙光寺の梵鐘に山田経光の名があるので経光は瀬谷郷に住んでいた。しかし城主として住していたのは城址がある当所（深見）なので、当地は深見ではなく瀬谷だったと記しているように読めます。この矛盾は経光が深見城の城主だったというところから発しています。経光の実在は確かだとしても、はたして経光は深見城の城主だったのかという疑問が残ります。

大和市教育委員会設置の現地説明板には次の様に書いてあります。

深見城は、境川に面した台地上に築かれています。北側から東側は切り立った急崖となっており、境川との比高差は一五メートルあり、天然の要害となっています。西側は天竺坂の大規模な堀割り、そして南側は平坦地形を加工して曲折を多用した二重の堀と、土塁構造が密接に連携した東西二つの虎口（こぐち＝門・出入り口）などを構築し、要害地形を形成しています。この縄張り構造は歴史遺構上、高い価値をもつものです。



発掘調査の成果から、この城の利用は十四世紀末ころより十六世紀末頃までの年代幅の中にあることがわかりました。一方、現存の城址の構造をみると、軍学による城制に整合することから十六世紀戦国時代と思われます。

南北朝時代から小田原北条氏の戦国時代までの痕跡をとどめ、十六世紀の縄張り構造をよく残す貴重な城址と言われています。現地は山林の中で、外郭、空堀、土塁の跡が起伏となって残っています。発掘調査は昭和五十九年（一九八四）から六十一年までと平成十一年（一九九九）から十二年までに行われたそうです。しかし現地には一枚の説明看板があるだけで、私たちには城の構造をつかむことはできませんでした。

⑩ 下鶴間長堀の遺跡

北部処理場（北部浄化センター）近くに旧石器時代の遺跡が三ヶ所発掘調査されているらしいですが、いずれも見学できるような状況ではなく、現地の説明板と『歴史マップ』の記述を次に転記します。

下鶴間長堀南遺跡

（下鶴間二五六七）

北部処理場建設（北部浄化センター）に伴う事前発掘調査として昭和五十八年四月から翌年の七月まで発掘調査された。旧石器時代から中世にいたる重複遺跡。

旧石器時代では八つの文化層が確認されている。当時は氷河時代で、その資料を残した狩人たちが生活していたのは現地表下約二・五㍍の関東ローム層中。今から約一万九七〇〇年前ころの狩人たちのキャンプ生活の跡が古富士火山起源の降下火山灰により封じ込められたものといえる。

狩猟具にはナイフ形石器が使用されていた。ナイフ形石器を量産するための石刃（せきじん）を作る石割り技術に特徴があり、その技術は「砂川型刃器技法（すながわがたじんきぎほう）と呼ばれている。この時期の同じような遺跡は全国的な広がりをもち、それには、地域色があることも認められている。（大和市教育委員会設置の現地の説明板を抜粋。）

下鶴間長堀遺跡　（下鶴間二五六七）

国道二四六号線建設に際して昭和五十四年（一九七九）に発掘調査が行われ、旧石器時代の遺物・遺構が出土しました。出土した細石刃石核（さいせきじんせっかく　細石刃を量産するために作られた中間製品）は、西南日本に多く分布する形態と技法が似ています。また、縄文時代の住居址　一軒と土器のほか、奈良・平安時代（八～十二世紀）の土師器等が出土しています。（『歴史マップ』１０頁）

長堀北遺跡　（下鶴間二八三一）

西松株式会社技術研究所建築工事に際して昭和六十二年（一九八七）に発掘調査が行われ、旧石器・縄文時代草創期の遺跡が発見されました。なかでも縄文時代草創期の石器群は貴重なもので、細石刃石核は北海道・東北地方に特徴的な「湧別技法」が用いられています。（『歴史マップ』１０頁）

この遺跡を最後に鶴間駅に向かいました。

以上でこの日訪れた場所の紹介を終わります。良く晴れた初冬の一日、出発点の茅ヶ崎駅に無事に帰着しました。

【引用・参考資料】

・『やまと歴史マップ』二〇一四年三月大和市教育委員会発行
・『新編相模国風土記稿』下鶴間村・深見村　雄山閣版三巻
・現地の説明板

第三〇八回 史跡・文化財めぐり

茅ヶ崎市内の東海道を歩く その①

山本俊雄　平野文明

日時　令和六年三月九日（土）　参加者　１３人

コース　集合　茅ヶ崎駅改札前　八時五十分までに集合し、バスで最初の見学地に向かいました。

茅ヶ崎駅発９：００―（市立病院経由藤沢駅北口行き４番乗り場）―バス停東小和田着　９：２１　（以下徒歩）　①明治天皇御小休所跡の碑―②新しくて古い道祖神（陽形双体道祖神）―③上正寺―④千手院―⑤広徳寺―⑥熊野神社―⑦⑧ぼたもち茶屋と七里役所跡―⑨郷境道―（東陶前からバス乗車）―茅ヶ崎駅着　１２：３０頃解散

事前学習会　令和六年二月二十日（火）午後、市民文化会館第三会議室で行いました。

市内を東西に横切る国道一号はかつての東海道です。道沿いには史跡も多いので、藤沢市境の小和田地区から、数回に分けて西方向に進む計画の一回目です。

① 明治天皇御小休所跡　小和田二丁目一一－二三の前

国道の北側にあります。この碑の建設に郷土会が関わっています。塩原富男著『茅ヶ崎の記念碑』九六頁に次のように載っています。

国道一号沿いのバス停「東小和田」から少し藤沢寄りに行った所に花崗岩の碑が建っている。一八六八年（慶応四）七月、江戸を東京と改め、九月には明治と改元されて、翌年江戸城

が皇居となった。この間、即位間もない明治天皇は、京都、東京間を往復された。この地（小和田村）の通過は、東幸が十月十日、還御は十二月九日だった。今、石碑のある所は、その往復の際のお休みどころとして使われた。新倉長左衛門の畑だったそうである。一行の総勢は五、六千人とも伝えられ、地元の人々の対応はさぞかしだったと思われるが、歴史の一こまの記念碑。

（碑文）

明治元年十月十日／十二月九日／明治天皇御小休所阯

（裏）

新倉隆氏先考長左エ門　長右エ門　勇吉　長松四代の遺志をつぎ／御蹟に記念碑を建立する志深く特志家と相はかり建碑す

昭和三十六年（一九六一）七月三十日／協賛小和田本宿町内会／茅ヶ崎郷土会　（高さ一四〇チセン　直径三二チセン）

② 新しくて古い道祖神（陽形双体道祖神） 小和田三丁目

石碑の少し西、「東小和田」バス停そばの小和田三郵便局を北に入り、最初の角を左に曲がった小さな四つ角に変った道祖神があります。塩原富男著『ふるさとの歴史散歩』六六頁に次の様に紹介してあります。

握手する男女神像が彫られていて寄り添う姿がほほえましい。彫りもなかなかの傑作。「小和田本宿郷」と古めかしい表現だが、昭和三十六年正月十日銘の再造立。ここには古くから道祖神があり、サイトヤキが行なわれていたので、サイトの神を目的としていることは明らかだが、和合と生産の具象とみられるこのスタイルを強調した現在の造立者の意図は何であろうか。握手像の様式は信州ではよく見かける形で、モデルは信州の道祖神かと思われる。

③ 上正寺 小和田二丁目一二番七三

バス停の「東小和田」と「小和田」の中間にあり、山門の前には親鸞聖人の像が建っています。

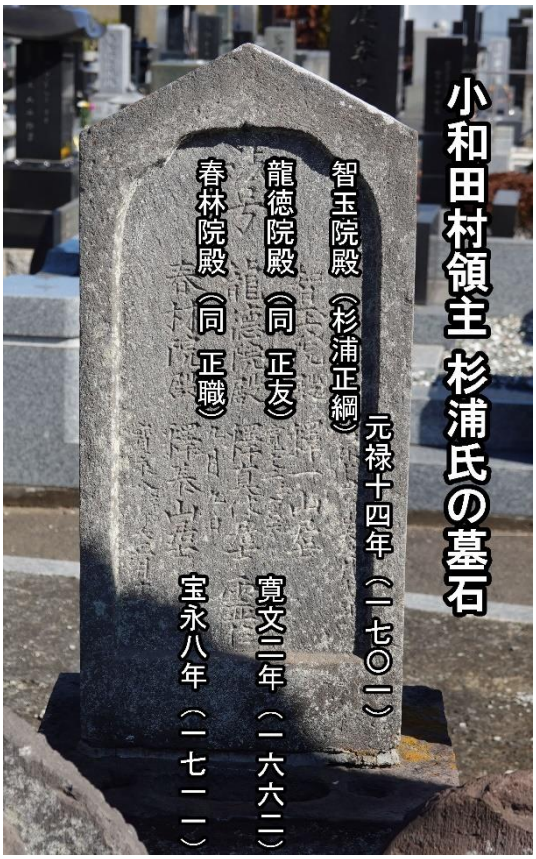
『ふるさとの歴史散歩』六六頁に次の様に載っています。

龍澤山龍徳院と号し浄土真宗（本派本願寺派）で、この派の寺は市内でここ一か寺だけである。同寺に伝わる『上正寺略縁

起』（『茅ヶ崎市史』1―六〇七頁）によれば、その草創は聖徳太子（敏達三～推古三十：五七四～六二二）が巡国のみぎり、自刻の像を残していったのに始まるとされ、寺の前身は、下寺尾にあった顕密兼学の「海円院」（七堂伽藍）で、文治年中（一一八五～八九）了智房道円のとき、兵火により焼失したため、小和田に移した。嘉禄年中（一二二五～六）に至り、了智は国府津において親鸞に会って帰依し、浄土真宗に改宗して寺号を「無上正覚寺」と改め、その開基となった。寺号はのち略して「上正寺」とした、と伝えている。また、了智は俗名佐々木四郎高綱で、のち、信州松本に正行寺を建て仁治二年（一二四一）同地で没し、享年七二歳だったと記されている。

江戸時代、小和田村の地頭杉浦氏の三代目正友は、家康に仕えて弓をよくし、寛永十九年（一六四二）には六千石を与えられて、勘定奉行になった。杉浦氏の墓所は、浅草長敬寺であるが、上正寺に正友らの供養塔がある。寺の院号龍徳院は、正友の法号からとったもので、正友を檀越（だんおつ、檀家・施主）としている。

寺に二つの市指定重要文化財がある。一つは、元、太子堂に安置されていた「聖徳太子二歳像」（像高七〇㌢）で、これは、聖徳太子自ら刻んだと伝えられるもので、その姿



は、太子の幼いころの姿を表し、手を合わせて祈っている形になっている。寄木造り、彩色玉眼、その造り方から江戸初期のものと考えられている。

他の一つは、山門を入ってすぐ左手の鐘楼下にある「旧寛永寺石灯篭」一基で、延宝九年（一六八一）の奉献銘がある。徳川家の菩提寺の上野寛永寺に、供養のために全国の大名から奉献されたもので、戊辰戦争（慶応四年：一八六八）や戦災で損害を受けた寛永寺の再建に協力した寄進者に、謝礼として贈られたものだという。

④ 千手院　代官町一-四

『ふるさとの歴史散歩』七一頁に次の様にあります。

天応山神保寺と号し、高野山真言宗。元和年中（一六一五～二三）の開創と伝えられ、開山を元栄といい、広徳寺と同じく高野山真言宗で、本尊は千手観音である。

境内右手に閻魔堂があり、閻魔十王が安置されている（現在は本堂内に祭られている）。江戸時代後期の作といわれる。閻魔像は坐像が多い中で、すべて立像であるのは珍しい。また元文二年（一七三七）銘の見事な宝篋印塔があり、本堂の前にはここだけに見られる木食寛正塔がある。文政二年（一八一九）の造立である。

千手院の閻魔十王像

閻魔十王にまつわる伝承を書いたパネルが、本堂内の像の前に置かれていました。

「大山の山開きの時は、安全を祈願して大山街道に出開帳され、参拝者から寄贈を仰いでいた。ところが、集まった御賽銭で地元の若者がお酒を飲んでしまった…。そこで憤慨して、立ち上がった。」

千手院では本堂にあげていただき、ご住職のお話をお聞きしました。

⑤ **廣徳寺**　小和田一-一七-五

『ふるさとの歴史散歩』七〇頁に次の様にあります。

山王山観音院と号し、高野山真言宗。開山を慶海といい、元和五年（一六一九）の草創と伝える。本尊は千手観音。境内に伊勢参りの講中が造立したという六地蔵（弘化三年：一八四六）などがある。

明治六～十一年（一八七三～七八）の間に行われた大区・小区制のとき、市域が含まれた第一八大区の区務所がここに置かれた。

⑥ **熊野神社**　小和田一丁目

『ふるさとの歴史散歩』六九頁に次の様に書かれています。

廣徳寺の横の道を北に向かうとすぐに熊野神社の鳥居が見える。小和田村の鎮守で、千手・廣徳二寺持ちであったという。祭神は熊野久須毘命で、境内に弁天社・豊受稲荷社・姥母神社があり、参道の鳥居脇に道祖神などの石造物の集合がみられる。本殿の右手に、相模なる小和田が浦のうば島はたれをまつやらひとり寝をするの歌碑がある。この碑は、以前他の場所にあったが、いつのころか、ここに移されたという。この歌は、地元の伝えによれば、江戸時代京都の公卿（三位以上の貴族）近衛某が東下の際、菱沼の「ぼたもち茶屋」に休んだ折に、短冊にして茶屋に残したと言われている。

この歌にまつわる伝承があり、それは、いつのころか、伊豆

の漁師と小和田の漁師の間で漁場争いが起り姥島の所属が問題になった。小和田村の人々は対応に困ったが、たまたま、この歌の短冊があることを思い出し、これを証拠に領分を主張することができた、というのである。伊豆側は、陸から一里以上離れた島はわが分だと宣言したとか、姥島は、小和田の浜から二キロ余り、問題になるわけはないと思われるが、この伝承には潤色された諸説があって真偽のほどは分からない。しかし、寛永三年（一六六五）に、茅ヶ崎村と小和田村で、浜境争論があり、幕府評定所の裁定を受けた史料的事実があるので、これはこうした背景の中から生まれた伝承ではなかろうか。

文政十三年（一八三〇）に出来た『我が住む里』と、明治十二年（一八七九）に編まれた『皇国地誌村誌』に、歌碑は現在の出口町一二の一画に祭られていた尾根大明神にあったことが記されています。しかし尾根大明神は今はありません。『郷土ちがさき』一五四号所載の「『皇国地誌村誌』と『我が住む里』に見る姥島の記事」参照。

⑦ ⑧ぼたもち茶屋・七里役所　小桜町

『ふるさとの歴史散歩』七二頁に次のようにあります。

『新編相模国風土記稿』の小和田村のところをみると、「小字牡丹餅（海道立場をいう）」とあって、その場所は、今の菱沼のバス停付近といわれている。名残を示すものは、わずかに残る松並木の松だけであるが、このあたりは、道が東西

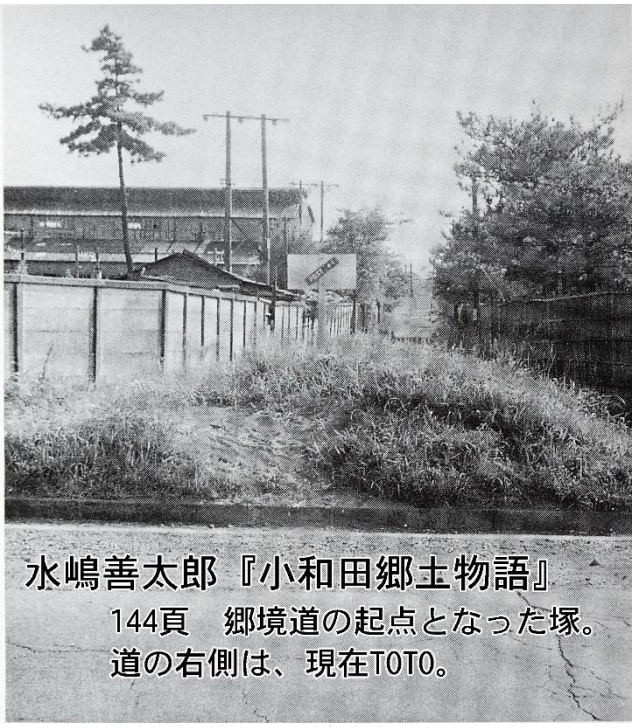
からの高みの頂きで、往昔は海まで見通しができた。古い街道記に「こはたにはもちをうる茶店あり…」とあり、いつしか「ぼたもち茶屋」といわれ、土地の呼び名となった。ちょうど南湖の立場と藤沢宿の中ほどでもあった。

また、ここには、紀州侯独自の飛脚の中継所があり、「七里役所」と呼ばれていた。ここにいた七里様といわれる役人は、大変いばっていたとも伝えられる。役人とその家族のものと言われる墓石が、菱沼の長福寺に移されている。

⑨郷境道

郷境道とは、国道一号沿いにあるＴＯＴＯの東側からまっすぐ海まで伸びる道路です。現在のＪＲ東海道線の南側をラチエン通りとも言い、北側の国道一号以北の室田通りは大山街道まで続いています。小和田村と茅ヶ崎村を分ける道でした。⑥熊野神社の項で触れました江戸時代の小和田村と茅ヶ崎村の浜境い争論の結果できたといわれています。烏帽子岩と大山道の手城塚を結んでいるとも言われています。海岸に近づくと烏帽子岩がラチエン通りの先に額縁に入っているように見えます。

国道一号から南に向かう道（郷境道）
右の写真と同じ位置で撮影。右側はTOTO。


水嶋善太郎『小和田郷土物語』
144頁　郷境道の起点となった塚。
道の右側は、現在TOTO。

この交差点でめぐりを終了し、バスで茅ヶ崎駅までもどり、無事に解散しました。

【引用資料】

・『ふるさとの歴史散歩』塩原富雄著昭和五十八年六月茅ヶ崎郷土会刊
・『茅ヶ崎の記念碑』塩原富雄著　平成三年三月茅ヶ崎文化資料館刊
・『茅ヶ崎市史』１　資料編（上）　昭和五十二年茅ヶ崎市刊
・資料館叢書15『茅ヶ崎の石仏　３　松林地区』令和二年茅ヶ崎市文化資料館刊

第三〇八回 史跡・文化財めぐり

「茅ケ崎市内の東海道を歩く その①」に参加して

茅ケ崎市香川在住　染谷倫人

茅ケ崎市内の史跡・文化財巡りに今回が三回目の参加となりました。今回も、事前勉強会に参加したことがよき勉強の場となりました。それは平野会長から「東海道分間延絵図」をもとに十八世紀末の茅ケ崎周辺の事物を教えてもらったことです。実際に史跡・文化財めぐりをして、絵図どおりに今もある社寺、絵図にはあるが今は現地の立て看板で紹介されているだけの「ぼたもち茶屋」など、この絵図があって今との違いが鮮明になりました。

麗（うらら） かや手を取り合へる道祖神

明治天皇御小休所跡で、バスで来た組（東小和田停留所で下車）と現地に集合した組が合流して今回の史跡・文化財巡りがスタートしました。俳句に詠んだ道祖神は、菱沼二丁目の、自動車や人の行き来の多い街角にありました。

どちらかというと道祖神や庚申塔は少し寂しいところにあるという先入観があったので違和感がありました。違和感といえばその造形でした。陽形双体道祖神という分類で、長野県には多くあるようですが、茅ケ崎に約百基ある道祖神で唯一のものとのことでした。また、中に彫られた男女の神様が手を取り合っている姿も、茅ケ崎では他に赤羽根に一基しかないものらしく微笑ましくもありました。また、造立が昭和中期であり、道祖神は古い時代のものという私の既成概念も壊してくれました。この道祖神は、事前勉強会で見せられた造立当時の写真では、野原の中に置かれたように見えましたから、この六十年余りで茅ケ崎の風景も大きく変わったのでしょう。変わったもの変わらないものそれを見るのもこの史跡・文化財めぐりの楽しさだと思います。

菩提寺を離れ燈籠鐘霞む

上正寺にて寛永寺の石燈籠に出会いました。

訪ねた当日は法要が入り、残念ながら市の重要文化財の「聖徳太子二歳像」を見ることはできませんでした。郷土会のスタッフの方々がお寺と事前に折衝をしてくれているので、堂内に安置している文化財をみることができるということは、前二回に参加した際に感じていました。頭の下がる思いです。しかし、開催日が法要と重なることもあり、予定通りにいかないという前提で参加しなくてはと感じた次第です。

とはいえ、市の重要文化

財の「旧寛永寺石燈籠」には会うことができました。本来徳川家の菩提寺、寛永寺に寄進された石燈籠は、戊辰戦争や戦災で損害を受けた寛永寺の復興に協力した寄進者に謝礼として贈られたものとのことでした。茅ヶ崎市には十基謝礼として贈られたが、現在は六基が確認できるとのことです。石燈籠は、戦禍がなければ寛永寺にあったのだろうと想像した時に前述の俳句ができました。「鐘霞む」は遠くの鐘の音が聞こえるという春の季語です。この石燈籠は、茅ヶ崎の地で今でも寛永寺の鐘の音を聞いているのかもしれません。もっとも私の勝手な解釈で、上正寺の鐘楼の近くにあるこの石燈籠は、満足して上正寺の鐘の音を聞いているかもしれません。

熊野社の朱塗り鐘楼春日受く（はるひ）

上正寺、千住院、廣徳寺とお寺を三か所廻ったあとに熊野神社を訪ねました。事前勉強会で、多くの石造物があり、特に姥母神社の説明が印象に残りました。当日は時間が押してしまい姥母神社周辺を見て終わりました。

そうした中で私が興味をもったのが鐘楼でした。神社に鐘楼と鐘、廃仏毀釈の中でよくぞ生き残ったと感心していると、平野会長から「鐘は昭和のものだ」と指摘されました。

（後日談になりますが、平野会長から「昭和になって作られた鐘楼と鐘については、江戸時代の鐘が太平洋戦争で供出させられ、戦後に再現されたものが多い。明治政府が出した神仏判然令が、茅ヶ崎辺りでは不徹底だったので太平洋戦争の頃まで残っていたのかも知れない。」と教えてもらいました。）

ところで、今まで多くの鐘楼を見てきましたが、朱塗りの鐘楼は初めてでした。正直、驚きました。それは、神社にある鐘楼自体が珍しいのに、朱色だったからです。どういった経緯で鐘楼ができ朱塗りの柱になったかはわかりませんが、その場で、春の日を受けて朱色の際立つ鐘楼の俳句が浮かびました。

今回も俳句を交えて、史跡・文化財めぐりの感想をしたためました。次回の東海道を訪ねるその②を楽しみにしています。

熊野神社境内の
姥母神社に祭られる姥神

文化財めぐり以外の事業報告

FM茅ヶ崎で茅ヶ崎かるたの紹介
２月８日　平野会長と杉山副会長で実施

コミセン湘南の講座「柳島の歴史」
３月１４日・２１日　平野会長

大岡越前祭で「越前の守忠相公の遺跡写真展」
茅ヶ崎市民文化会館Ｃ展示室
４月２１日（土）～２２日（日）

中島二ツ谷　八兵衛稲荷の調査
４月２８日（日）
稲荷講中の依頼で実施。京都の伏見稲荷から文久二年（１８６２）に発行された分霊状とご神体、慶応四年（一八六八）ののぼり旗などがありました。

令和六年度の主な事業予定

茅ヶ崎郷土会の総会　６月２８日（金）午後１時半から　於茅ヶ崎市役所分庁舎５階（コミュニティホール）Ａ・Ｂ会議室

史跡文化財めぐり
①６月８日（第２土）第３０９回「市内の東海道を歩く」（その２）
②１０月１９日（第３土）３１０回「小田原市の石垣山城址」事前勉強会は９月１０日（火）午後を予定
③１２月１４日（第２土）３１１回「市内の東海道を歩く」（その３）
事前勉強会は１１月５日（火）午後を予定
④　令和７年３月１５日（第３土）３１２回　市外実施を検討中
事前勉強会は２月１８日（火）午後を予定

市民文化祭（茅ヶ崎、みんなのアートフェス２０２４）
写真展　１０月２６・２７日（土日）於市民文化会館Ｃ展示室
第５２回郷土芸能大会　１１月２４日（日）　於　市民文化会館小ホール

検討中の新しい取り組み（会員外の参加　歓迎）
①「茅ヶ崎の神社と社殿彫刻」・「茅ヶ崎の年中行事」・「茅ヶ崎人物誌」・「茅ヶ崎の指定文化財」などの講演会を考えています。
②『茅ヶ崎市史』第４巻（通史編）の輪読会
③（仮称）『中島郷土誌』の原稿のデジタルデータ化と郷土会ＨＰへの掲載（当会のＨＰは地味な内容ですが、多くの人が見ています。）
これらは内容が決まり次第、お知らせします。

【編集後記】
平成６年度が始まってからもう２ヶ月がたちました。また、５月１日の発行予定だった「郷土ちがさき」がひと月遅れてしまいました。会員の皆様にはお詫びいたします。
今、茅ヶ崎郷土会は苦境のまっただ中を漂っております。会員数は約７０名、会費も順調に集まっていますので、首が回らないということはないのですが、スタッフが足りないのです。産業界でも人員を集めるのが大変という時代ですが、会を何とか存続させたいのです。
読者の皆さん、力と知恵を茅ヶ崎郷土会にお貸し下さい。毎月一回の打合せ会に参加して、会の運営を計り、担当する役割などを決めます。やってみようという方は０９０―８１７３―８８４５平野まで。皆さんからのご連絡を首を長くして待っております。
（編集子）

―２５０―